



◆近代短歌の巨人たち

高野公彦
Kimihiko Takano

北原白秋 (1)

白色光への道

北原白秋は、多面・多力・多作の人であった。五十

七歳で亡くなったので長生きとは言えないが、その生涯に詩・短歌・童謡・随筆・紀行文・詩論・歌論などたくさん優れた作品を残した。小説や俳句なども試み、また『まざあ・ぐうす』という翻訳書もある。

そんな中で一般の人々によく知られているのは、白秋が作詞した唄であろう。出だしの部分を聞いたら、うんあれだな、と思いつく人も多いはずだ。

○からたちの花が咲いたよ……

○雪のふる夜はたのしいベチカ……

○この道はいつか来た道……

○雨はふるふる、城ヶ島の磯に……

○唄はちやつきりぶし、男は次郎長……

どの唄も日本人に親しまれてきた。曲名は「からた

ちの花」「ベチカ」「この道」「城ヶ島の雨」「ちやつきり節」

である。私は子供のころ、これらの唄をよく耳にした。

また自分でも歌った。

ごく平易な言葉ばかりで作られたこれらの詞がながく日本人に愛唱されてきたのは、白秋の言葉遣いが日本語の真髄を掴んでいたからであろう（作曲家の付けたメロディが優れていたことは、むろん考慮に入れなければならぬけれど）。

白秋は幅広くさまざまな仕事をしたが、中心は詩と短歌である。もっと踏み込んで言えば、詩を一つの焦点とし、短歌をもう一つの焦点とした大きな楕円――

それが北原白秋である。詩の業績としては、『邪宗門』

『思ひ出』『東京景物詩及其他』そして『海豹と雲』などが挙げられよう。右の「からたちの花」などの童謡も、詩



右から若山敦水、中村蘇水、北原白秋。
早稲田大学に入学してから親しくなった。
明治37(1904)年10月撮影。

作の一端である。

ただし、いつも詩と短歌が同じ比重であったわけではない。大きな物差しで言うならば、白秋は詩から出発し、まもなく短歌に踏み入り、詩を視野の中に置きながら徐々に短歌へ重心を移していった人だ。

この稿の目的は、あくまでも歌人白秋の業績を紹介することなので、詩には触れないことにする。秀歌を抜き出して鑑賞しながら、あわせて歌風の変遷なども見てゆきたい。

歌集は、長歌集『観想の秋』を除けば、全部で十一冊ある。それらを便宜的に「Ⅰ、青年期」「Ⅱ、中期」「Ⅲ、晩年」の三期に分けることにしよう。大まかにいえば、Ⅰは二十代、Ⅱは三十代及び四十代、Ⅲは五十代の作品である。

I

白秋は、明治十八(一八八五)年福岡県沖端村(現、柳川市)に生まれた。父は酒造業を営み、裕福な家であった。十九歳で上京して早稲田大学高等予科文科に入学、二十一歳で与謝野鉄幹主宰の新詩社に入り、「明星」に多くの詩歌を発表するようになった。

二十四歳で詩集『邪宗門』を刊行して脚光を浴び、二十六歳で詩集『思ひ出』を刊行し、詩人として確固たる地歩を築いた。詩作のかたわら短歌も作っていたが、大正二(一九一三)年それらを収めた歌集『桐の花』を刊行し、歌人としてデビューした。時に二十八歳。

春の鳥な鳴きそ鳴きそあかあかと外の面の
草に日の入る夕
『桐の花』

歌集の巻頭歌。「な鳴きそ鳴きそ」は江戸端歌から採った詞句で、「な鳴きそ」「鳴きそ」どちらも「鳴くな」の意。この詞句から、逆に鳥のさかんな囀りが聞こえてくる。

一首は「春の鳥よ、そんなに鳴くな、窓の外にはあかあかと夕光が満ち、陽はいま草はらに沈もうとしてい」ぐらしいの意味である。鳥の囀りや夕日の明るい光、春の夕べの悩ましさと、といったものが微妙に混じり合い、歌全体から青春の華やかと憂愁のようなのが伝わってくる。二十四歳の時の作。

草わかば色鉛筆の赤き粉のちるがいとしく
寝て削るなり
『桐の花』

草の若葉に赤い色鉛筆の粉が散るのを、少年のように喜んでい。青年白秋が少年のような歌を作ることには違和感を覚える人がいるかもしれないが、大人が童話を書くのと同じように、青年が少年をうたっても少しも変ではない。白秋は『桐の花』の中でしばしば自分の中の「少年」をうたっている。

クリスチナ・ロセチが頭巾かぶせまし秋
のはじめの母の横顔
『桐の花』

クリスチナ・ロセチ(現在では普通ロセッティと書く)



第一歌集『桐の花』表紙。
大正2(1913)年1月、東雲堂書店より刊行。
白秋みずから装幀した。

は十九世紀イギリスの唯美派の女流詩人。涼しくな
った秋の初めには、母にロセチの頭巾をかぶせてみた
い、そうすれば母もあの西洋人のように美しく見える
だろう、とロマンチックな想像を楽しんでいるのであ
る。雑誌「明星」が取り入れた西洋的な耽美趣味を受
け継いだ歌といえよう。『桐の花』には江戸趣味と西洋
趣味が交錯して現われる。

君かへす朝の舗石さくさくと雪よ林檎の
香のごとくふれ
『桐の花』

一夜を共にした恋人が、小石を敷き詰めた舗道を
さくさくと踏みながら去ってゆく。あたりは今にも雪
の降る気配が漂う。恋人を見送りながら作者は「雪よ、
林檎の香のように降れ」と眩く。このフレーズが美し
く切なく響いて、清らかな相聞歌となっている。

時計の針IとIとに来るときするどく君
をおもひつめにき
『桐の花』

白秋の恋人は、じつは松下俊子という人妻であった。
白秋は彼女の夫から姦通罪で訴えられ、二週間ほど
監獄に拘留された。この歌は、俊子をひたすら恋慕
っていた頃のことを、出所後に回想した歌である。

詞書に「夜ふけて」とあるから、「時計の針IとIと
に来るとき」は深夜一時五分ごろである。するどく思
いつめるといふのは、たとえ相手の人妻であっても自
分の恋の真情をつらぬこう、と覚悟したことを言うの

だろう。内面的な苦悩を、長針と短針がIの所で重
なる、というふうに斬新な感覚で詠んだのが見事である。
このとき二十七歳。

*

事件後、白秋は詩人として得た名声を失い、失意の
日々を送ったが、翌大正二年(二十八歳)初めての歌集
『桐の花』を刊行した。まもなく偶然再会した俊子と結
婚し、神奈川県三崎町に移り住んだ。ここから第二歌
集『雲母集』の世界が始まる。歌集には、この世にひそ
む大きな生命力に対する讃仰(あるいは渴仰)が折々に
頭をもたげている。

大きな手があらはれて昼深し上から卵を
つかみけるかも
『雲母集』

時刻は昼さがりの頃、物音のしない空間に一つの卵
があつて、ふいに大きな手が現われ、上から卵を掴み去
った——そんな単純な内容であるが、どこことなく非現
実的な雰囲気漂う歌である。手はたぶん人間の手で
あろうし、場所は鶏小屋であろうし、卵は鶏卵であろ
う。けれども、この作品は人間を消し、鶏小屋を消し、
鶏を消している。その結果、一首の中に在るのは、どこ
とも知れぬ広い空間と、一つの卵と、昼さがりの時間
と、大きな手だけである。日常性を持たないそれらの
モノヤコトが出会って、何の意味も無い小さな出来事が
起こった。それをスバリと描くことで、一首はふしぎな
詩的空間を開示している。日常的な現実を超えた世界、



与謝野鉄幹の渡欧送別会にて。
前列左3人目から永井荷風、森鷗外、与謝野光、鉄幹、
馬場孤蝶、生田葵山、吉井勇。
後列左から4人目佐藤春夫、高村光太郎、2人おいて北原白秋、
木下空太郎、1人おいて折口信夫。
明治44(1911)年11月4日、上野の精養軒にて。

という意味で、これはシュールレアリスムの世界といっ
ていいだろう。

こういう歌が『雲母集』に散見される。飛躍した言
い方になるが、姦通事件に関わる現実的な苦惱から
自己を解放する方法として辿り着いたのが、このシュ
ールレアリスム的な手法だったのでなかろうか。

不二の山れいろうとしてひさかたの天の
一方に立てりけるかも
『雲母集』

これは大らかで典雅で力強い歌である。作者の、
内なる生命力に見合うような力強さがある。歌を単
純化して意味を少なくし、さらに平仮名を多用して
快い韻律を生み出している。富士山をこれほど単純
化し美的に造形した歌は他にないだろう。

寂しさに海を覗けばあはれあはれ章魚逃
げてゆく真昼の光
『雲母集』

三崎町の海辺に住んだので、おのずから海の生き物
を詠んだ歌が多い。たとえば烏賊、鮑、河豚、鱈、牡
蠣、船虫、海星などが登場し、歌集に潮風の匂いを吹
き込んでいる。

この一首、章魚のいる明るい海底を簡潔にえがき、
章魚独特のするりとした動きが目に浮かぶ。『雲母集』
には「寂し」という言葉がしきりに出てくるがそれは

感情的な寂しさではなく、人間存在そのものの寂しさ
から生まれ出た言葉のようだ。

網の目に閻浮檀金の仏みて光りかがやく秋
の夕ぐれ
『雲母集』

漁師町だから、あちこちに魚網が干してあっただろ
う。「閻浮檀金」は仏教用語で、閻浮樹の森を流れる河
から採れる砂金を檀金という。このころ白秋は『梁塵
秘抄』を愛読していた。秋の夕暮れ、網の目ごとに金色
の仏が光りかがやく、というシュールな歌である。白秋
の内部で、「海辺」と「梁塵秘抄」と「シュールレアリスム」
が合体して生まれた歌といえよう。

見桃寺の鶏長鳴けりはらばるとそれにこた
ふるはいづこの鶏ぞ
『雲母集』

三崎町の見桃寺に仮寓していた時の作。歌集を読む
と、雪がふった夜の、明けがたに詠まれた歌であること
が分かる。寺で飼われている鶏が夜明けを告げて長々
と鳴き、それに応えるように遠くで鶏が鳴声を上げる。
人の気配のない広い闇と、闇の中で鳴き交わす二つの
小さな生命、またそれらの声を聴いている一人の生命。
いわば、静かな闇の中における生命の交流（あるいは交
感）をえがき出した作品である。

たかの・きみひこ「コスモス」選者



右から尾山篤二郎、北原白秋、萩原朝太郎。
大正4(1915)年1月13日、
朝太郎の招きに応じて前橋を訪れたとき。



◆近代短歌の巨人たち

高野公彦
Kumihiko Takano

北原白秋

(2)

白色光への道

Ⅱ、中期

女犯戒犯し果てけりこまごまとこの曉ち
かく雪つもる音

〔雀の卵〕

前回は「Ⅰ、青年期」の歌について書いたが、今回はそれに続く「Ⅱ、中期」、及び「Ⅲ、晩年」の歌を見てゆくことにしよう。

大正三(一九一四)年、白秋はせっかく妻にした俊子と離婚してしまう。その理由として「私は詩歌ひとすじで貧しさも気にしない。私の心は醒めたが、妻はいまも痴情に溺れている」「私は永遠の真理を追求し、妻は現世の虚栄に走る」という意味のことを歌集の中で書いているが、白秋の一方的な決め付けのような気がする。おそらく経済的な困窮が、離婚の最大の原

因だったのではなからうか。

しかし考えてみれば、夫と別れて自分のところへ来た女性を、一年余りで離別してしまったのだから、白秋もつらい気分を味わっただろう。「女犯戒犯し果てけり」は、自分のしたことを静かに反省し、悔いている言葉である。耳は、雪のつもる明け方のかすかな音を聴いている。自分の犯した罪は消えない。雪は、その罪を浄めるかのように、あるいはいつそう際立たせるかのように、さらさらと降りつもる。

昼ながら幽かに光る螢一つ孟宗の藪を出でて消えたり

〔雀の卵〕

俊子と別れて二年後(大正五年)、白秋は江口章子と結婚し、貧しいながら落ち着いた生活に入る。右の一

首は、孟宗の竹藪にいた一匹の螢がかすかに光りながら昼の外光の中へ消えてゆくさまを詠んでいる。このころ住んだ東京郊外の生活を反映するかのよう、田園の風物を静かに眺めた、閑寂な味わいのある歌が増えてゆく。

だが、章子との結婚生活も四年間でまたもや破綻する。ただし、この出来事は白秋の短歌にほとんど痕跡を残していない。

結婚について白秋には不運の影が付きまといっていたが、大正十(一九二一)年、三十六歳のとき三度目の妻・佐藤菊子を迎えてから、ようやく安定した幸福な家庭生活を築くことができたようになった。結婚した次の年、長男・隆太郎が生まれる。

水うちて赤き火星を待つ夜さや父は大き
椅子に子は小さき椅子に

〔風隠集〕

火星が地球に接近した大正十三(一九二四)年の作。隆太郎は二歳。「水うちて」は、暑さをしずめるための打ち水。「夜さ」は「夜」に同じ。「や」は助詞で、「よ」と同じと考えればいい。

夜に入つて、赤い火星が見えてくるのを、大きい椅子と小さい椅子を並べて庭先で待つ父と幼子。しみじみと父親の幸福感を味わう白秋がここにいる。

空晴れて鐘の音美し苜蓿の受胎の真昼近
づきにけり

〔海阪〕

大正十四(一九二五)年、樺太・北海道を旅行した折、函館のトラピスト修道院を訪れ、この歌を詠んだ。季節は夏、修道院の周囲に苜蓿(白詰草であろう)の草原が広がり、そこに蜜を求める蜂が飛び回り、今しも真昼の鐘が鳴り響く——そんな風景が浮かび上がる。花の受粉を「受胎」と言ったのは、キリスト教の聖なる雰囲気、作者の心が同化したからであろう。神秘的な自然の営みを感じさせる歌である。

下り尽す一夜の霜やこの暁をほろんちよち
よちよと澄む鳥のこゑ

〔白南風〕

霜が下り尽して、庭も道路も白くなった朝、どこかで鳥が鳴く。雀であろうか、ほろんちよちよちよという澄んだ優しい鳴き声。冬の早朝の凜冽澄明な空気が伝わってくる歌である。オノマトペ(擬音語・擬態語)の名手であった白秋の才能がいかに発揮された一首。

驟雨の後日の照り来る草野原におびただし
く笑ふ光を感ず

〔夢殿〕

福岡県・太刀洗飛行場での作。昭和三(一九二八)年七月、白秋はここから単葉の飛行機(ドルニエ・メルクル)に乗り、故郷柳川の上空を飛んだ。搭乗する前、さつと俄雨が通り過ぎ、そのあと空が晴れた。飛行場の草はらには一面に雨の雫が宿り、輝いている。その様子を「おびただしく笑ふ光」と言ったのが新鮮で、初めて飛行機に乗ろうとする白秋の心躍りが伝わってくる。



右から服部嘉香、北原白秋、三木露風、前田夕暮。
大正14(1925)年7月末頃の撮影。

行く水の目にとどまらぬ青水沫鶴の尾
は触れにたりけり
〔溪流唱〕

昭和十(一九三五)年、伊豆の湯ヶ島温泉に滞在した折の作。流れゆく溪流の水面に、青みを帯びた水の沫が現われたかと思うと消え、消えたかと思うと現われる。その溪流の水に、これまた目に見えないほどの素早さでセキレイの尾が触れる。一つの動と、もう一つの動が触れ合う瞬間をとらえていながら、歌全体は静謐である。それは、動きよりも、かすかな触れ合いが一首の中心をなしているからである。自然の光景を克明に描写し、どこか象徴的な味わいを湛えた歌といえよう。

Ⅲ、晩年

池水に病ふ緋鯉の死ぬときは音立てて跳ねてただち息停む
〔橡〕

昭和十一(一九三六)年「多磨」七月号に発表され、「或る真昼」という題が付いている。作者五十一歳。

歌は、「池の水に病んでいる緋鯉は、死ぬ時は、音を立てて水面に跳ね上がり、一瞬あとに息を停めている」の意。何か不気味な歌である。「生」は一瞬ののち「死」に転じる、ということだが、白秋はなぜこんな歌を詠んだのだろうか。鯉の死ではなく、誰か人間の死ぬ瞬間を思っただろうか。詠んだのかもしれない。

この年、いわゆる二・二六事件が起きた。事件は直

ぐ鎮圧され、青年将校たちは逮捕された。同年七月五日に判決が下され、七月十二日に十五名が銃殺刑に処された。白秋は「多磨」八月号に、「一人一人銃をそろへし目先に立ちしげかりきしかく思はむ」(処刑場に引き出された一人一人は、銃の前に立ち、静かに発砲の瞬間を待っていたらう。そう思いたい)など五首を載せている。処刑された人たちに同情的な歌である。

それより一か月ほど前に詠まれたのが、緋鯉の歌である。白秋が二・二六事件以後の成り行きを注目していたとすれば、この歌は獄中の青年将校たちが処刑される瞬間を想像して詠んだ、と考えることが可能である。

物の葉やあそぶ蜩蝶はずしくてみなあはれなり風に逸れゆく
〔橡〕

初秋のころの庭先の景を詠んだ歌。蜩蝶が草の葉にとまろうとして、とまるともなく風に流されてゆく。

白秋はこのころ単なる写実でなく、「新幽玄体」の歌を目ざしていた。新幽玄体とは、物そのものをえがくのではなく、物の気配、あるいは物と物のひびき合いをえがいて歌に象徴性を持たせようとする芸術理念であったようだ。この一首、白秋の自信作であった。

ニコライ堂この夜揺りかへり鳴る鐘の大き
あり小さきあり小さきあり大ききあり
〔黒檜〕

昭和十二(一九三七)年、白秋は眼底出血のため御茶ノ水の杏雲堂病院に入院した。これは病室でクリスマス



煙草をもって木に寄りかかる白秋。
世田谷砧村大蔵の自宅付近の竹林で。
昭和6(1931)年9月撮影。

ス・イヴに詠んだもの。すぐ近くにあるニコライ堂の鐘が、大きく小さく、また小さく大きく鳴り響いてくる。糖尿病で視力の落ちた白秋は、その鐘の音で気持ちを紛らわしているのである。下旬の大幅な字余りは、揺りかえる鐘を彷彿させて効果的。

金色堂み雪ふりつむ鞘堂の内幽かにか黄
金ひびらく

「金色堂を思ふ」という一連の中にある。鞘堂は、建物を風雨から守る覆いの役目をする簡単な堂。「ひびらく」は、土器などがしぜんに音を立てて割れることだが、ここでは金色堂の内部に貼り付けられた金箔が剥落することを言う。

ふりつむ雪の下に金色堂が静まり、内部の金箔がかすかに剥がれ落ちてゆく。「幽かにか」の「か」は疑問の助詞。想像裡の金色堂を詠んでいるのだが、この世のものとも思えないほど美しく静謐な景である。

秋の日の白光にしも我が澄みて思ふかき
は為すなきとし

昭和十五（一九四〇）年の作、このとき五十五歳。今なら中年だが、当時はもう初老である。病気のため、視力は一段と衰えていた。見えるのは、ほのぐらいモノクロふうな風景だったらしい。秋の日ざしの中

で、白秋は静かに端座している。思うともなく物思いをしていると、いつか心が澄んで、もう何も思っていないのと同じような状態になり、このまま何もしなくていい、という境地に入ったような気がする——そんな内容であろう。白秋が秋の「白光」に同化したのである。

これは死の二年前の作である。白秋の詩歌作品は初め華麗な色彩を帯びていたが、歳月と共に華麗と枯淡が混じり合うようになり、晩年はこのような「白」に到達した。光の白は、全ての色彩が混じり合った白であるが、白秋の晩年の歌もさまざまな色彩が混じり合った果ての白、と考えていいかもしれない。

白秋に「雅号の由来」という随筆がある。それによると、白秋というペンネームは、若いころ次のように誕生したらしい。

「中学三四年の頃文学好きの同級生の誰彼と回覧雑誌を出すことになって、そこでみんなで籤引にした。それでわたくしが引当てたのが秋の字であった。で頭に白をすべてがお揃ひに付けると云ふ約束だったので、白秋となった。」

こうして偶然決まった「北原白秋」という名前は、よく見ると枯淡であり、寂寥感さえ漂う。華麗な作風から出発した青年は、この「北原白秋」というイメージに向かって成長し続けた、とも言えるだろう。

たかの・きみひこ「コスモス」選者



『新万葉集』（昭和13年 改造社）発会の日、
昭和12（1937）年頃の撮影。
前列左から窪田空穂、与謝野晶子、佐佐木信綱、
尾上柴舟、太田水穂、大悟法利雄。
後列左から折口信夫、土岐善麿、斎藤茂吉、
北原白秋、前田夕暮、山本実彦、大橋松平。